

ざまみ防災ゆんたく会

開催レポート

～過去の災害をふりかえり、日頃の備えと地域の「共助」を語り合う～



開催概要

- 日時：2026年8月17日（月） 19:00 ～ 20:30
- 場所：座間味コミュニティセンター
- 参加者数：計20名（住民参加者8名、役場職員12名 ※講師・事務局を除く）
- 主催：座間味村役場 総務課（令和8年度 自主防災組織等が多様な主体と連携して行う地域防災力向上事業「自分たちの村は自分たちで守るプロジェクト」）

開催趣旨・目的（自主防災組織設立にむけて）

座間味村は美しい自然に囲まれる一方、台風や地震・津波などの自然災害リスクと隣り合わせにあります。小規模な有人3島からなる離島ゆえに、災害発生時には那覇からの外部支援（公助）が到着するまでに一定の時間を要することが避けられません。

本事業は、災害時に限られた資源と人員で命を守るため、「自助（自分の命は自分で守る）」と「共助（地域で助け合う）」の体制を強化し、その要となる「自主防災組織（自防組織）」の設立と避難所運営能力の向上を目指しています。今回の「ゆんたく会」は、過去の台風や津波警報時の記憶を呼び起こし、座間味ならではの課題や「日頃から自分たちにできる備え」を住民目線で洗い出す最初のステップとして開催されました。

進行プログラム

- 開会・主催者挨拶
 - 座間味村役場総務課長（松田力）より、挨拶および事業の趣旨説明
- 進行役・専門家紹介
 - 進行役：宮道喜一（一般社団法人災害プラットフォームおきなわ 事業統括／特定非営利活動法人まちなか研究所わくわく 代表理事）
- 【セッション1】台風・風水害から学ぶ日頃の備え
 - 話題提供：2023年台風6号（長期停電）および2026年台風6号のふりかえり
 - グループでゆんたく：停電・孤立への各家庭での備えと地域のつながり
- 【セッション2】大規模地震・津波に備える地域の共助
 - 話題提供：南西諸島海溝型地震の発生可能性、および2024年4月3日の津波警報発令時の状況
 - グループでゆんたく：高台避難の課題、トイレ問題、要配慮者支援、観光客誘導
- 今後のステップ案内・閉会
 - 今後の避難所運営訓練や防災キャンプ（一泊避難体験）の紹介、閉会挨拶

【テーマ1】風水害・台風から学ぶ日頃の備え

■ 話題提供概要（宮道）

- （長期停電と物資途絶）： 真夏のトップシーズンを襲った台風は、進路の迷走により長期化。村内でも数日間にわたる大停電が発生し、熱中症リスクが急増しました。さらに船の長期欠航により、商店の棚から食料品や日用品が完全に消え、物理的孤立を経験しました。通信障害により宿側からお客様への連絡も遮断され、大きな混乱が生じました。
- 2026年6月 台風6号（猛烈な風被害）： 最大瞬間風速 45m/s を超える猛烈な風により、各所で倒木が発生して道路が塞がれ、建物の一部破損や一時的停電が発生しました。
- 風水害対策の核心： 台風は地震と異なり、「事前に予測ができる災害」です。だからこそ、予報が出た段階で「誰が、いつ、どこに避難するか」「どのようにお隣に声をかけるか」を事前に決めておくことができます。



■ グループディスカッションで出た参加者の声

1. 電源確保と冷蔵庫問題（最も切実なライフライン）

- 「とにかく電気が止まったときの暑さと、冷蔵庫の中身が全滅するのが一番きつい。そのため、1週間停電して船が来ないことを見越して、冷凍ストッカーや冷凍庫を別に購入し、台風前には満杯にして小型発電機を回せるよう準備している家庭が増えている」
- 「ポータブルバッテリーや小型の家庭用発電機は、台風が来るとわかった時点で満充電にするのが集落の常識。区長や地域のリーダーの間でも、台風接近前にガソリン燃料をドラム缶などで確保しておく慣が定着しつつある」
- 「スマホの充電用に、車のシガーソケットから充電できるアダプターは絶対に外せない必需品。台風前には車のガソリンも満タンにしておく」

2. 水とガスの確保、生活の知恵

- 「過去の数日間の停電時、プロパンガスなので調理は問題なくできた。また、水道については、役場が水道ポンプ稼働用のディーゼル燃料と発電機を事前に死守してくれたおかげで、5日間一度も断水しなかった。これは離島のインフラとして本当にありがたかった」
- 「テレビが見られなくなると、停電情報のアップデートや運行状況がわからなくなる。そのため、台風時は手回し式や電池式の『ラジオ』が最高の情報源になる」

3. 住民発の連絡網「区独自のLINEグループ」の誕生

- 「台風時に公的な情報が届きにくかった教訓から、私たちの集落（阿佐地区など）では、区長を中心に自主的に独自のLINEグループを立ち上げた。現在、約43名（地区世帯の約8割）が加入している。これにより、『どここの倒木を片付けた』『電気が復旧した』などの生活情報を、役場を介さず住民同士でリアルタイムに共有・助け合える仕組みが機能している」

【テーマ 2】大規模地震・津波に備える地域の共助

■ 話題提供概要（宮道）

- ・ 沖縄周辺で M8 級の巨大地震が発生するリスクがあること、発災時には震度 6 弱以上の揺れにより家具の倒壊等が生じ、初動の避難行動自体が極めて困難になることや、座間味村特有の狭い路地で古いブロック塀が連鎖倒壊し、津波から逃れるための高台への避難路が塞がれる危険性について触れました。また、インフラや港湾の損壊による「島全体の物理的孤立」の懸念を伝え、避難生活中のエコノミークラス症候群等に起因する「災害関連死」を防ぐための日頃の共助の備えが極めて重要であると訴えました。

■ グループディスカッションで出た参加者の声

1. 高台避難（一次避難先）の雨風・寒さ対策

- ・ 「津波警報で急いで裏山や高台に逃げても、水が引くまで何時間も留まらなければならない。もし避難する時が『夜間』や『大雨の暴風雨』だったら、屋根のない高台に高齢者や赤ちゃんを立たせておくことはできない。一時避難場所に、最低限の雨風を凌げる簡易テントやブルーシートを張れる支柱、緊急用の水・トイレをあらかじめ整備しておくべきだ」

2. 鍵がない！「防災倉庫の管理問題」

- ・ 「各避難場所（高台など）には村の防災倉庫があるが、現状、鍵を持っているのは区長が役場だけ。今、多くの区長は仕事などで他地区や那覇にいても多く、地震直後に鍵を開けられる人が現場にいない可能性が極めて高い。逃げたはいいが、倉庫が開けられずに物資を使えないというのは致命的。キーボックスの設置や、緊急時のガラス破壊解錠ルールなどを本気で決めてほしい」

3. 避難時の「大渋滞」と「徒歩避難ルール」

- ・ 「津波警報が出た瞬間、みんなが一斉に高台へ車で避難しようとするため、道が狭い島内は一瞬で大渋滞になり、避難行動が完全に麻痺する。動ける若者や健常者は『徒歩で避難する』という絶対ルールを作り、車避難は高齢者や足の不自由な要配慮者、医療従事者のみに優先開放すべきだ。高台にある学校のグラウンドを避難時の緊急駐車場として開放するなどの連携も必要」

4. 要配慮者・高齢者支援の具体策

- ・ 「車椅子暮らしの高齢者や、高齢者だけの 2 人暮らし世帯がどこにいるかは近所ならわかる。しかし、いざ発災したときに『誰がその人を背負って高台へ運ぶか』が普段から担当決め（バディ制など）されていないと、本番では必ず取り残されてしまう」

5. 衛生・トイレ対策とおがくずトイレの提案

- ・ 「下水道が破裂したら水洗トイレは一発で使えなくなる。避難生活で最も過酷なのはトイレ。過去の被災地で活用されている『おがくずを利用したバイオトイレ』や『非常用設置型トイレ』を、自主防災組織や村の備蓄品として最優先で導入すべき」

6. 観光客の誘導と「船の沖出し」を巡る懸念

- ・ 「言葉の通じない外国人や土地勘のない観光客がビーチや海にいるとき、誰が警報を伝えて高台に誘導するのか。観光業者、ダイビングショップ等との協定が不可欠」
- ・ 「防災無線で『津波が来るときは船を沖に出しなさい』という放送が流れることがある。東日本大震災の漁船の成功例もあるが、沖出しは危険を伴う。沖出しを推奨して事故が起きた場合、村や放送した側の法的責任や保障はどうなるのか微妙な問題であり、放送文言や指針を再検討してほしい」

ゆんたく会から見えてきた、座間味村における防災・災害時対応における懸念

1. 災害時の決定的な担い手不足

消防団の多くを役場職員が担っているため、発災時の役場対応と集落での救助・避難所運営をどう地域全体で分担し、支え合うかが大切になる。

2. 3島分散による物理的孤立のリスク

有人3島が分散する離島のため、発災時に港や通信に影響が出た場合、外部支援が到着するまでの数日間を地域で協力して乗り切る工夫が求められる。

3. 年間10万人の観光客の安全確保

土地勘のない観光客や外国人に対し、津波警報時など

にどのように情報を伝え、一緒に高台へ避難・誘導するかの仕組みづくりが課題。

4. 自主防災組織の不在と意識の改革

村内に自主防災組織がなく、これから住民同士で「自分たちの命をどう守るか」を話し合い、共助の輪を広げていく取り組みが求められる。

5. 避難環境の向上と備品運用の見直し

いざという時に誰もが防災倉庫の鍵を開けられる工夫や、一時避難先での雨風対策・トイレ確保など、少しずつ地域の避難環境を整えていく必要がある。

事業概要

座間味村 自分たちの村は自分たちで守るプロジェクト ～住民・観光事業者・医療・行政が一体となった地域防災力向上事業～

目標 -令和8年度

3つの字で
実践的な
自主防災組織が
立ち上がっている



避難所の開設・運営力向上

資機材と体制を充実させ、災害時に即応できる地域防災力を高める



離島特性に応じた体制強化

離島の制約や人員不足に対応し、災害リスクと地域資源を共有する



自主防災組織の結成と始動

モデル3字で組織を立ち上げ、村民の自助や共助の意識改革を図る



座間味村防災モデルの構築

訓練で実践的な課題を明確にし、他地域へ展開可能なモデルを作る

<事業を通した取り組み>

7-9月 関係者 ヒアリング

役場・社協・自治会・観光事業者・福祉関係者等への聞き取り

8-10月 防災 ゆんたく会

区ごとに、過去の災害を振り返り、地域の課題と体制を検討

10-12月 村内防災士 ネットワーク

村内の防災士の意見交換の場づくりとネットワーク構築

11-1月 実践 防災 キャンプ

各区の公民館での避難宿泊体験

10-3月 自主防災組織 立ち上げ

地域の課題と資源把握、規約・体制づくり。防災備蓄等購入

発行・お問い合わせ先： 座間味村役場 総務課（「自分たちの村は自分たちで守るプロジェクト」事務局）

住所： 〒901-3496 沖縄県座間味村座間味 109

電話番号： 098-987-2311

発行日： 2026 年 8 月

事業協力：

- 一般社団法人災害プラットフォームおきなわ（DMP0）
- 特定非営利活動法人まちなか研究所わくわく